学内広報

2013.9.24 no.1444

そうだ 相談、行こう。

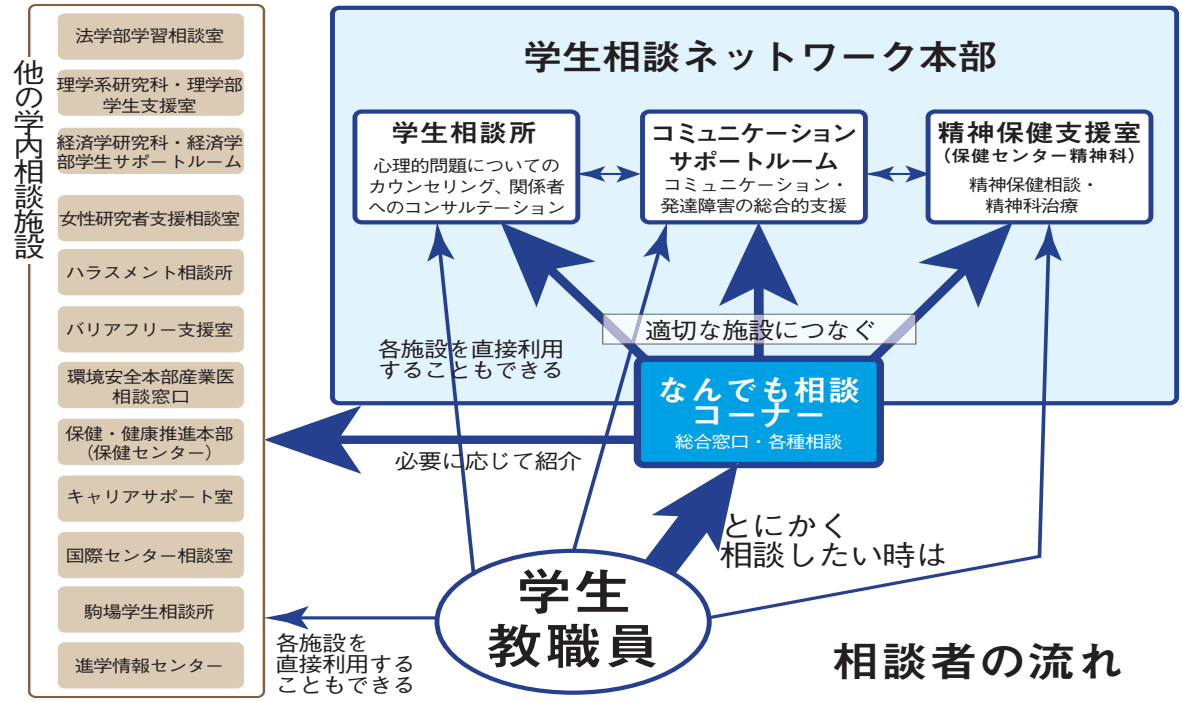
東京大学の「学生相談ネットワーク本部」とは?

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

そうだ相談、行こう。

迷える東大生を見かけたら迷わずアクセスしたい学生相談ネットワークの世界

迷える学生を見たら迷わず利用したい部署が東大にはあります。それは、学生や教職員に対する相談・支援機能の強化を標榜する学生相談ネットワーク本部。全国的にも先進的なこのネットワークは、本郷、駒場、柏、白金の各キャンパスに拠点を置く4つの施設と専門の教職員で構成されています。本特集では、密に連携しながら学生支援に尽力する本部の姿と、過去の相談からまとめられた悩める東大生の事例を紹介。困っている学生への支援は相談から始まります。



東大の「学生相談ネットワーク本部」とは？

学生相談ネットワーク本部
本部長
古田 元夫

学業、キャリアパス、対人関係などで、メンタルな悩みをもつ東大生は少なくありません。グローバルなレベルでの競争、キャリアパスの多様化、入学までに体験する人間関係の狭まりなどの中で、迷える学生は増加傾向にあります。こうした学生や、その周囲にいる教職員、仲間、親族に対する相談・支援機能を抜本的に強化するため、2008年に設置されたのが、学生相談ネットワーク本部です。

ここには、学生相談所、精神保健支援室、コミュニケーション・サポートルーム、なんでも相談コーナーの4つの相談施設があり、互いに連携を図っています。各施設では、学生や教職員の様々な状況に応じ、臨床心理士（カウンセラー）や医師が対応しています。

どの相談施設に行ったらよいかわからない時や、とにかく悩みを聞いてほしい時は、まずなんでも相談コーナーのドアを叩いてください。相談員が状況に合わせて適切な学生相談ネットワーク本部の相談施設や他の学内相談施設を紹介します。

精神科医師、心理士、意欲ある職員が協働して構成する、全国の大学でもユニークな学生支援の仕組みを積極的に利用してください。

学生相談所

研究意欲、進路の迷い、対人関係の葛藤など、学生生活で生じる様々な心理的問題について、一人ひとりの状況を的確に把握し、これからどうしたらよいかを専門のカウンセラーとともに考える場所です。学生本人だけでなく、教職員、研究室の仲間やご家族など、周囲の方々が本学学生のことで相談したい場合にも対応しています。

◎本郷
場所／第二本部棟2階
時間／月～金　10:00～17:00
◎柏
場所／環境棟1階117
時間／月～金　10:00～17:00

◎駒場学生相談所
場所／1号館3階
時間／月～金　10:00～17:00
※学生相談ネットワーク本部とは別組織ですが、同様の活動をしています。

相談員の皆さん

倉光 修さん
所長・教授
私の部屋の壁には、山水画が架けられています。箱庭が創れる部屋もあります。鑑賞や創作も内界表現です。

高野 明さん
講師
主に柏を担当しています。気軽に利用してください。趣味はうちの猫と戯れること、写真を撮ることです。

藤岡 勲さん
助教
ほっとする時間をお持ちですか？私はお笑いをほぼ毎日見てます。

慶野遥香さん
助教
インドア派の私ですが、秋の空を見ながらの散歩は大好きです。

江上奈美子さん
助教
皆さんの困っていることについて一緒に考えたいと思います。

精神保健支援室

東大構成員の精神保健支援を目的に以下の業務を行なっています。(1)精神科診療ならびに相談、(2)定期健康診断におけるメンタルチェック、(3)講義・研修会・冊子作成配布などによる啓発活動、(4)精神保健に関る環境やシステム改善のための提言、(5)上記の根拠となる臨床疫学データの解析。活動を通じてキャンパスを活性化することを目指しています。

◎本郷
場所／安田講堂2階
時間／月～金　9:15～17:00

◎駒場
場所／保健センター2階
時間／月～金　9:15～17:00
◎柏
場所／保健センター
時間／月～金　9:15～17:00

相談員の皆さん

渡邉慶一郎さん
室長・准教授
6名の精神科医が、皆様のこころの健康増進を目指しています。診療面では、保健センターのスタッフとも協働して専門的治療を提供します。

中村 光さん
助教
大切な学生時代を充実したものに。つらさ半分、嬉しさ2倍！を目指します。荷が重い、道が見えない…そんな時、ドアを叩いてみて下さい。

島田隆史さん
助教
学校生活を送る中、こころの不調を来すこともあります。そんな時は力を抜いて、お近くの精神保健支援室に相談にいらして下さい。

武井邦夫さん
助教
趣味はジャイアンのひとりカラオケ。最近よく走ってますがお腹が引っ込みません。ご相談お待ちしています。

コミュニケーション・サポートルーム

発達障害（自閉症スペクトラム障害、注意欠如多動性障害＝ADHDなど）やその傾向のために困難を抱えている学生の相談に乗っています。本人の同意が得られれば、教職員との連携をとる等、環境調整も積極的に行っています。

◎本郷
場所／第二本部棟2階　時間／月～金　10:00～17:00　※駒場、柏でも相談できます（http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/csr/）

相談員の皆さん

渡邉慶一郎さん
室長・准教授
（精神保健支援室と兼務）

川瀬英理さん
学生の手を引張り、積極的に問題解決に取り組みます。専門は認知行動療法。

綱島三恵さん
大きな視野を持ったお姉さん的立場で接しています。専門は発達臨床心理学です。

佐々木司さん
教授
精神科医で、思春期から学生の精神保健、修学問題、睡眠習慣などが専門です。

なんでも相談コーナー

予約不要

大学職員としての業務経験を生かし、問題解決に向けての提案、学内外の相談施設の案内を行っています。教職員や保護者も利用でき、相談しやすい環境を整えています。悩みがありましたら一人で抱え込まずぜひ気軽にご利用ください。電話でも相談できます。

◎本郷
場所／第二本部棟2階
時間／月～金　9:30～17:30
場所／工学部2号館2階
時間／火・木　10:00～17:00

◎柏
場所／新領域基盤棟2階2B5室
時間／月･水･金 10:00～17:00
◎白金（学生相談所、精神保健支援室と連携）
場所／医科研1号館2階
時間／木　10:00～17:00

相談員の皆さん

榎本弘子さん
職員となる前はピアノ教師。想像もつかなかった今です。色々経験しました。

小宮一修さん
人生楽ありゃ苦もあるさ。お話しするだけでも楽になります。お待ちしてます。

福井 諭さん
相談、愚痴聞き等なんでもOK! 皆さんの心を楽にするお手伝いをいたします。

菊池より子さん
室長
忙しい日々の中では、時には気分転換も必要です。私の場合は、運動不足解消も兼ねた愛犬との散歩です。

悩める東大生はすぐそこにいる……

よくある相談事例より

※個人情報保護のため、複数の事例を参考にして模擬的な事例を作成しています。

学生相談ネットワーク本部では、教職員が学生の不調に早く気づけるよう、過去の事例を元によくあるパターンをまとめた冊子(『学生のこころのケア手引き』『東京大学学生相談ネットワーク本部活動報告』)を発行しています。バックナンバーから事例のいくつかを抜粋し紹介します。

CASE 1 学部進学後にひきこもった３年生

数ヶ月登校していない友人のことを心配した学生が、なんでも相談コーナーを利用。学生相談所を紹介し、友人を連れて来てもらった。その友人は、進学振り分けで希望先に行けず、やる気を失い、授業にもついていけず休むようになったとのこと。ここ1ヶ月はアパートにこもり、昼夜逆転の生活。引き続き学生相談所を利用し、生活リズムを整えつつ、卒業までのプロセスを確認したり、教員に学業について相談したりと、段階的に課題を克服することで、本人は再び大学に復帰していった。

不登校やひきこもりは大学生にも多く見られます。一人暮らしの学生は生活リズムが乱れやすく、家族も状況をつかみにくいため、注意が必要です。家族・教職員・友人等の周囲の人間が早期に問題に気づき、複雑化・深刻化する前に対応することで、状況が改善することがあります。

慶野先生

CASE 2 行き詰まりを相談できなかった大学院生

修士2年生の内気な学生。研究の行き詰まりを人に相談できないでいたところ、教員から「君には博士課程進学は無理だね」と言われる。仕方なく就職活動を始めたが、全社不採用。研究意欲も落ちて、9月に学生相談所に来談する。眠れないと訴えるので、相談員は保健センター受診も勧めた。生活リズムを整え、学生相談所で状況をどう伝えるかを話し合い、研究室の助教には困ったことを打ち明けられるようになる。研究をまとめるために1年留年したが、無事修士号を得て、就職を果たした。

内向的な学生は、困ったときに周囲の人々に助けを求めるのが苦手で、教員や先輩に質問するのを躊躇する傾向があります。定期的な面談を設け、悩みをあるがままに受け止めながら、適切な自己主張を促し、問題解決への道をともに模索するような関わりが有益でしょう。

倉光先生

CASE 3 細かな指導がないと実力を発揮できない学生

教員からなんでも相談コーナーに「院生が3週間も研究室に来ない。どうしたらよいか」と電話があった。一緒の来室を勧めたところ、数日後に教員と本人がやってきた。「研究室での作業で、一体何から手を付けて良いか分からない」との訴えがあり、コミュニケーション・サポートルームのスタッフと相談し、本人にはスケジュール表を作って教員の指示を書き込むこと、教員には課題は細かく分類して指示をすることを助言し、実施してもらったところ、事態が好転した。

このような特性を持つ学生には、いつ何をどこまで行うかを教員に細かく指導してもらうことで、状況が改善できるケースが多いようです。この学生の場合、発達障害の特徴がみられたので、コミュニケーション・サポートルームと連携し、適切なアドバイスで状況が改善した例です。

江上先生

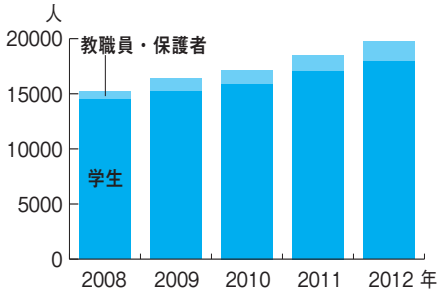
CASE 4 レポートが苦手で発達障害のある学生

学部3年生の男性。実験レポートが書けず、必修の実験を休み始めたため、担当教員からコミュニケーション・サポートルーム（CSR）の利用を勧められた。発達歴や検査などから発達障害の存在が明らかになり、以前から文章作成には苦労していたことも分かった。CSRから担当教員に発達障害の説明を行い、教員からは特に「考察」の記載例を提示しながらレポートを指導した。その後も定期的にCSRで現状を確認し、必要時に教員に個別指導してもらうことで、単位取得に至った。

発達障害のひとつである「自閉症スペクトラム障害」は、一般成人の約１％います。外観では分かりにくいため、本人の努力不足と誤解されやすい障害です。「他の人と同じように」「自分から聞くように」という指導ではなく、具体的な指導や定期的な学習面談が効果的です。

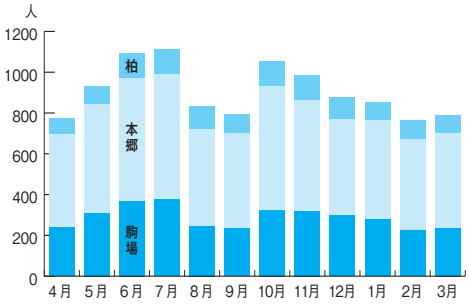
川瀬先生

DATA 1 学生相談ネットワーク本部利用者数の年別推移



4つの相談施設の延べ利用者数を合計したもの。教職員・保護者の割合は、2008年は4.9%でしたが2012年には9.2%まで上昇。施設別では、教職員・保護者はなんでも相談コーナーの利用が多いようです。

DATA 2 精神保健支援室利用者数の月別推移



年間で見ると、入学・進学からしばらくたった6～7月が利用のピーク。夏休みの頃には減りますが、休みが明けて授業や研究活動が本格化する10～11月に第2のピークがやってくることがわかります。

CASE 5　研究室の劇薬で自殺未遂を起こした学生

教養時代から周囲となじめず、研究室配属後も先輩とのやり取りがうまくいかず、死にたくなっていた学生。研究室で備品を用いた自殺を試みたが失敗。自宅で刃物で自傷したが致死傷に至らなかった。本人から誰にも言わない約束で相談を受けた精神科医師は、放置は危険と考え、本人の了承を得ずに家族および指導教員に連絡して経緯を説明。まずは家族に本人の保護を求め、治療の継続を約束させた。

精神科診療では一般診療の場合にも増してプライバシー保護に注意していますが、差し迫った状況では危機介入を優先します。緊急性が高い場合は、たとえ本人が同意しなくても、家族や担当教員に連絡して密に連携を取るようにします。

渡邉先生

CASE 6　実験についていけない学生

実験系の学科に進学した男子学生。一人の実験が多く、毎日の予習、レポート作成と、夜遅くまでの実験で強い疲労を覚えるようになった。考えがまとまらず憂うつな気分が持続し、次第に自殺も考えるようになったため、自ら保健センターへ。うつ病の診断を受け、薬物療法などの治療が始まり、半年間休学して療養。復学に際し実験担当の教員のサポートも受け、無事卒業することができた。

学生の体力や得意分野には個人差があり、特に一人での実験、研究活動では、教員の知らないうちに深刻な精神疾患にかかっている場合があります。こまめに声をかけたり、出席状況を気にするような、学生の不調を早めに感じ取れるような体制が必要でしょう。

中村先生

CASE 7　基礎学力不足による不適応に苦しむ大学院生

学部時代とは分野が異なる研究室に進学した他大出身の修士1年生。入学後まもなく、授業のレベルの高さと基本的学力の不足を自覚し、学部時代の知識が役立たないこともあって焦燥。5月末に担当教員から「相当がんばらないと学位は取れない」と告げられて不眠と抑うつ感に襲われ、保健センターを受診した。薬物療法を開始し、教員とも面談。ポスドクが学生を直接指導することになり、不眠や意欲低下が解消された。

大学院重点化が急速に進んだ昨今、英語読解力などの基礎学力が不十分な大学院生も稀ではありません。自主性を求めるのは当然ですが、入学を許可した以上、できる限り学生を支援する責任があります。研究室の目指す水準と学生の実際の到達度を現実的に見極める意識が必要です。

佐々木先生

学生のサインを見逃すな!

授業や研究室で……

★欠席や遅刻が増える
★成績や作業効率が急に下がる
★集団の中で孤立している
★生彩のない表情になり、身なりをかまわない

事務の窓口で……

★いきなり涙ぐむ
★非合理的な思い込みが強く自己主張が激しい
★同じことを何度も確認する
★要領を得ない話し方をする

その他の場面で……

★つらそうにうずくまっている
★自分や他人を傷つけようとする
★意味不明な言動をしている

そんな学生を見かけたら……

本人の話を聴いてみよう

話を聴くときの基本姿勢

★相手の話を途中で遮らない
★話し手の感情を否定しない
★話題を変えない
★道徳的・倫理的批判をしない

話を聴くときのスキル

★オウム返し
★言い換え
★確認して話す

話をしても深刻そうなら……

学生相談ネットワーク本部へ

03-5841-7867（なやむな）
なんでも相談コーナー（本郷）
http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/

DATA 3　東大生の学生生活サイクル

1年生は高校と大きく違う環境への適応が課題。2年生になると成績順で決まる進学振り分けが重大なテーマになり、周囲の優秀さに劣等感を抱く東大生も……。3年生は「学部」という新しい環境に慣れることが課題。3年の冬頃から民間企業の就職活動が始まり、進学する学生は夏頃に院試を受けます。修士課程になると授業に加え研究への主体的な取り組みが求められます。修士2年になると修士論文の準備が本格化。博士課程では研究室でリーダーシップが求められると同時に人生設計も大切な課題になってきます。

INFO　メールマガジンのお知らせ

学生相談ネットワーク本部では、各部局の庶務担当や東大ポータルを通じて2012年度から月1回メールマガジンを配信しています。近年の学生を捉える視点を共有し、教職員の協働・連携を促進することで、学生支援の充実・強化を図ろうというものです。これまで、「不登校・ひきこもり」「これだけは知っておきたいアルコールの知識」「優秀だけど不器用：東大生の発達障害」「進路選択と就職活動」「気になる学生への対応・話の聴き方」……といった内容をお届けしてきました。東大ポータルの一斉通知に更新情報が出るほか、バックナンバーを http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/mail/ で閲覧することができますので、ぜひアクセスを。

問い合わせ：学生相談ネットワーク本部（27867）　制作：本部広報課（22031）

プロジェクトで復興を支援する

再生のアカデミズム

［実践編］ 第13回

東日本大震災、それに伴う原発事故という未曽有の大災害の発生以降、東京大学では様々な形で復興支援を行っています。また、総長メッセージ「生きる。ともに」に表されているように、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動を行っていく覚悟でいます。この連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

プロジェクト名

大槌文化ハウス

東大と縁の深い大槌町に、この9月、図書室や展示室の機能を持つ小さな文化施設が誕生しました。町の文化を再生する拠点に、と設営したのは総合研究博物館。プロジェクト担当の松本文夫特任准教授にお話をうかがいました。

――「大槌文化ハウス」の概要と、オープンまでの経緯を教えてもらえませんか。

松本　博物館にできる復興支援は何かを考えて生まれた小さな文化施設です。博物館からの寄贈図書3,500冊と学術標本を配置した53㎡の部屋です。書棚、大テーブル、プロジェクタ、エアコンを配備し、読書・学習・集会の場所として利用できます。完成後の管理運営は大槌町が行い、博物館は文化支援の活動を通して今後の運営に協力していきます。

プロジェクトの発端は、震災後の4月に西野嘉章館長の発案で準備した「モバイルゲル」です。館収蔵のモンゴル遊牧民のテントを運んで人が集まる施設を作る案でしたが、場所が確保できず実施に至りませんでした。その後、仮設住宅地で中長期的に使用する戸建の「文化ハウス」を計画しましたが、資金調達の状況が変わって行き詰まりました。打開策を協議する中で、高台にある大槌町中央公民館の一室を使わせていただくことになりました。内装工事だけなら費用を大幅に減らせます。今年の春に実施案をつくり、夏に設営工事を済ませた次第です。

――複数の企業が支援してくれたそうですね。

松本　はい。渉外本部に紹介された世界的金融企業のバークレイズ・グループと、以前から博物館の「モバイルミュージアム」に支援をいただいている新日鉄興和不動産株式会社から、貴重なご寄附をいただきました。施設設営だけでなく、今後の運営にもご協賛をいただく予定です。さらに、地元の三浦設備株式会社にはエアコン設置のための電源引込工事でご協力をいただきました。感謝をこめて入口横のパネルに3社の名を刻みました。

――室内に目をやると、4点の展示物が博物館らしさを醸し出していますね。

松本　海のウミカラマツ、空のオオアカゲラ、陸のアンティロープ・マスク、そして人工物の数理模型です。最初からカテゴリを分けたわけではなく、博物館コレクションから候補を吟味した結果こうなりました。2006年から博物館で「モバイルミュージアム」という分散連携型の博物館プロジェクトを実施していますが、大槌文化ハウスもその一つとして位置づけています。図書はすべて博物館の教職員や家族友人からの寄贈品です。文学全集、事典、単行本、文庫本、絵本、マンガと何でもあります。

――いろいろある方が日常的ですよね。

松本　大槌文化ハウスの管理運営の中心となる大槌町生涯学習課の佐々木健課長は以下の言葉をよく引き合いに出されます。「文化とは人々の日常生活を集めたものである」。大槌とゆかりの深い作家・井上ひさしさんの言葉です。ハードの整備が先行するなかで、町の文化をいかに再生するか。それは人々の日常生活の再生に他ならないということです。

大槌文化ハウスの完成はプロジェクトの第一段階です。大槌町による運営を継続的に支援するのが今後の私たちの役割です。文化支援の一環として、東大の研究者によるレクチャやワークショップの開催を企画しています。研究者が専門分野を伝えるだけでなく、どこかで地域との関わりを意識し、そこから新しい研究課題が展開することもあると思います。

――外からの文化支援は他にあるのですか。

松本　学外の事例ですが、大槌町では防災行政無線で正午に「ひょっこりひょうたん島」のジャズ調のテーマが流れます。3.11の津波で音源が流失し、佐々木課長の仲介でピアニストの小曽根真さんが新しい音源を提供されました。外部の協力者が大槌の地域資源と出会い、新しい文化が生まれたわけです。

大学の研究教育の機会はキャンパスの内部に留まる必要はありません。「モバイルミュージアム」や「インターメディアテク」で博物館の活動は学外に飛び出しました。いまは大学が外に出ることができる時代です。大槌文化ハウスは小さな施設ですが、ここでの活動が大槌の文化再生の一助になればと思います。

高台にある中央公民館の一室を改装してつくられた「大槌文化ハウス」。窓からは大槌の市街地が見える。右上の写真は展示物の一つ、オオアカゲラ

「大槌文化ハウス」の建築模型と松本先生

プロジェクトに関する問い合わせ

総合研究博物館　特任准教授　松本文夫
matsumoto@um.u-tokyo.ac.jp

構成：本部広報課（内線：22031）

ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第5回

泉 泰行　渉外本部渉外・基金グループ企画チーム
渉外・基金課 一般職員

東京大学をスポーツで盛り上げる!!

みなさん最近スポーツしてますか？スポーツの秋目前ということで今回は東大スポーツ振興基金について少しご紹介させてもらいます。

東大スポーツ振興基金とは東京大学の部活動の支援と学生・教職員がより健康になるための環境整備を目的として設立された基金です。

部活動の支援では、部室の建て替え、照明設備の設置やグラウンドの設備費用など、一つの部活動だけではカバーできない部分を支援します。今までの実績として東大球場の人工芝張替、硬式庭球部のクラブハウスの改修や軟式野球部のピッチングマシーンの購入などを行いました。

また、東大スポーツ振興基金の活動を通じて東京大学のスポーツを応援することで教職員・学生が一体となるきっかけになればとも思っています。例えば、練習環境が改善して各部活動がますます活躍した結果、ニュースなどで取り上げられるようになったらうれしいし、応援したくなりますよね。各部活動のニュースはFacebookの「東大スポーツ / Todai sports navi」というページで配信しているので見てみてくださいね！

最後に、各部活動とコラボして実現した応援グッズの紹介を。応援グッズとは売り上げの一部が東京大学基金を通じて部活動の支援にあてられるグッズです。現在、生協の本郷第二購買部にてア式蹴球（サッカー）部応援グッズ（応援Tシャツ 2800円、タオルマフラー 2200円）と硬式野球部応援グッズ（Tシャツ2種類・2200円〜）が発売されています。スポーツの秋ということでこれらを身につけて観戦や運動をすることで、東京大学をスポーツで盛り上げてみませんか！

実際に着てみました（写真は蹴球部・硬式野球部員）

東京大学基金事務局　**教職員寄附1億円キャンペーン中！**

TEL 03-5841-1217
内線21217
E-mail　kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
URL　http://utf.u-tokyo.ac.jp/

留学生さんいらっしゃい!

第4回

海を越えて東大に来た学生に聞きました。

ドイツ

カトリン・プロイスラーさん

Katrin Preusler

総合文化研究科超域文化科学専攻特別研究生

旧東独領のハレ出身。映画が好きで邦画ならジブリ派。乗馬とバレエとテコンドーもこなす愛称「カトちゃん」だ。

Q. どうして日本に来たんですか?

ドイツのテレビで放映していた「ドラゴンボール」などを見て日本に興味を持ち、アジアの美術史や日本語を勉強したいと思いました。2009年から1年間、武蔵大学で学んだ経験があり、今回が2度目の日本留学になります。

Q. ではどうして東大を選んだんですか?

私が在籍するハレ大学と東大の間で交換留学のプログラムがあると知って応募しました。「東大、いいね」と先生も薦めてくれました。

Q. いま研究しているのはどんなこと?

ドイツにはないOTAKU文化やモダンアートに興味があり、特に村上隆さんに注目しています。春のセミナーでは「村上隆—工房中での巨匠の役割」という題目で発表しました。

Q. 日本に来て戸惑ったことはありますか?

冬に多くの日本人がマスクをして歩いているのには驚きました。あと、京都のお寺に行ったとき、飲むと特別な力がつくという水があって、そこに人が並んでいるのが意外でした。ドイツにはそういう水はないと思うので……。

Q. 出身地の自慢を教えて!

私の故郷・ハレの名物は「ハローレン」。ボール型チョコの中にクリームが入っています。写真は市内のパイスニッツ公園。ボートやBBQもできる人気スポットです。

協力：国際センター本郷オフィス　制作：本部広報課

※ご本人が英語で話した言葉を本部広報課が日本語に訳して掲載しています。

ワタシのオシゴト 第91回

RELAY COLUMN

法学政治学研究科専門員（図書担当） 藤本 蒂子

法研図書室 裏方稼業

銀杏並木が借景のデスク。秋もいいですよ～

職場は法学部研究室図書室（略称「法研図書室」）。着任3年目です。法学部は格式が高く厳めしい部局という先入観があったのですが、意外にも(^^)先生方はフランクでフレンドリー、謹厳だけれど温かい雰囲気があります。図書室のある法3号館は別名「法学部研究室」。研究室≒図書室と言われるほど両者の関係は密接で、80万冊を超える蔵書は法学部の研究教育の命綱と言えるでしょう。この「命綱」を、20名のスタッフが5つの係に分かれて、守り、構築し、利用に供することで、研究教育の下支えをしているわけですが、私の主な仕事は、この5係の協働作業を裏から支え、目標に向けて舟を進めていくことです。今年度の目標は「利用者が喜ぶ図書室を作る。」平凡だけれど、図書室の職員ってみんなこれを励みに頑張っていると思うのです。利用者が喜んでくれれば職員も嬉しくなりますし、そうやってプラスの連鎖が起こるような職場の土台作りが私のオシゴトです。

「敷居は低く志は高く」スタッフ全員集合！

得意ワザ：スローフードのスピード料理
自分の性格：ものぐさ＋せっかち＋α
次回執筆者のご指名：宮川幸治さん
次回執筆者との関係：過半数代表団でご一緒しました
次回執筆者の紹介：100「いいね！」の好青年

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部 第94回

東大発ベンチャー企業におじゃましま～す!

工学系研究科松尾研究室のメンバーを中心に設立され、言語解析を得意とする(株)AppReSearch。山田尚史代表取締役と上野山勝也取締役にお話を伺いました。

―― 強みはどんなところですか?

上野山 みな若いため形骸化した常識にとらわれる必要がない事・専門性の高いメンバーが集まっている所です。エンジニアリングへの深い理解を前提に、みなもう一つ別の分野で強みを持っている人が多いです。また事業面ではパッケージ化した機械学習エンジンを適切に企業に「提案営業」できる企業が現状ではほぼないため、この領域でのシェアを伸ばしています。

―― ビッグデータブームに対してどう考えますか?

山田 当社では人間の目ではとても追いつかないような“ビッグデータ”に対して、複雑な判断をできる技術を保有し、爆発的に増えるデータの解析を可能にするソリューションを提供しています。

上野山 大規模データを捌けるかという話と解析の賢さ（人工知能）の話が混ぜこぜに語られますが、弊社は後者に興味が有ります。「賢い解析技術」と「人間の日常生活」との「境界」は現在、歪な形をしていますが今後10年程度でシステムソリューションを通じ再構築され滑らかになり、人間性を摩耗させる作業を人がやる必要がなくなる世界が近づいていると思います。

―― 今後の展開や御社のアピールなどお願いします！

上野山 従業員一人当たり売上・利益を重視したいです。それがソフトウエアの価値を表すと思います。

山田 機械学習を誰もが使えるようにすることも、弊社の目標の一つで、“ANASIS”というプロジェクトをコアに事業拡大しています。専門知識を発揮するだけではなく、相手の立場に立ったビジネスを展開できたらと考えています。デジタルソリューションを企業様に提供することでクライアントも当社もハッピーになれたらいいですね。

株式会社AppReSearch

本社：東京大学本郷キャンパス 産学連携プラザ4階
設立：2012年10月16日
事業内容：言語解析・機械学習エンジンの開発、Webマイニングによる情報計測等

http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/

インタープリターズ・バイブル

第74回

総合文化研究科 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門
真船 文隆

いままで見えなかったものが見えるようになる

兵庫県の理化学研究所播磨研究所には、X線自由電子レーザー、通称SACLAと呼ばれる、強いX線の光を出す巨大な施設がある。波長の短いX線で、波長0.1 nm付近の明るさは、既存の加速器SPring-8と比べて10億倍で、まさにこれまで経験したことのない光を出すことができる施設である。2011年6月7日に、波長0.12 nmの光を発振することに成功し、その後も、より明るく、波長をより短くするために改善が加えられている一方で、昨年度より研究者への供用が開始された。

実験は、ハッチと呼ばれる遮蔽された部屋の中で行う。研究者は、各々の研究の目的にあった実験装置をハッチの中に設置する。非常に強いX線なので、人体に影響のないように、光が通るときにはハッチの中に入れない構造になっていて、実験をするときはハッチの外から遠隔でデータを取得する。ハッチ内部の壁には小さな穴があり、その穴から光が出射される。研究者は、割り当てられた実験時間を、自分の装置とサンプルと向かい合って過ごすのが精一杯であり、その穴の向こうがどうなっているのか想像する余裕もないのだが、実はその壁の向こうには400メートルの加速器と200メートル強の光発生部があり、安定して光を出すために多くの技術者が見張っているという大掛かりな施設である。

SACLAでは、様々な研究が進められているが、「いままでに見えなかったものが見えるようになる」ことが研究ターゲットの一つであろう。例えば蛋白質結晶の構造を調べる場合、SPring-8では比較的大きな結晶を用意し、更にしばらくX線にあて続けることが必要である。SACLAでは、数ミクロン程度の小さな結晶でも、また短い時間で、構造を解析することが可能である。これは、大きな結晶になりにくい蛋白質の構造解析を可能にする大きな一歩である。また、近い将来、蛋白質が1分子あれば、その構造が解析できるようになると期待されている。

X線自由電子レーザーにとって、この数年間は、まさに劇的な進歩の連続であった。今後も研究者らによる継続的な努力によって、さらに「いままで見えなかったものが見えるようになる」ことが期待される。

科学技術インタープリター養成プログラム
http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/

救援・復興支援室より

第28回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(8月〜10月)

8月	福島県相馬市「寺子屋・相馬育英館」学習支援ボランティア
8月	平成 25 年度夏季ボランティア隊の活動
8月	福島県大熊町の避難生徒への学習支援ボランティア
9月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア
9月25日	第 19 回救援・復興支援室会議
9月〜10月	福島県相馬市「寺子屋・相馬育英館」学習支援ボランティア

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)
文：佐藤 克憲

救援・復興支援室ボランティア支援班が震災以降毎年ここ遠野を宿泊拠点に実施している「夏季ボランティア隊」、本年度は8月9日(金)〜12日(月)の第1班と8月23日(金)〜26 日(月)の第2班が活動しました。

今回の活動場所は、昨年までの大槌町と同様に、壊滅的な被害を受けた陸前高田市でした。今回お世話になったNPOでは、行方不明者発見の力となるべく、復興工事着手前の場所や、一部は始まった工事を一時中断してもらい、ボランティアの協力を得て、更なるがれき撤去・捜索等を行っているとのことです。

今回は第1班・第2班とも、側溝周辺の草刈りを行った後、側溝の土出しを行い、がれきと生活品・遺品の分別や集積作業等を行いました。

津波で家屋等が無くなってしまった街は現在雑草の緑でカムフラージュされ、以前の姿を知っている人でなければ、元々こういう場所だったのではないかと思われかねない状態です。

側溝の土出し等の活動は、実際にそこで暮らしていた人達の「生活の証」が出てくることから、ここが被災により無くなってしまった場所であることをリアルに感じることができ、参加者が震災について考える上で貴重な経験になったのではないかと思っています。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」

(左) 側溝清掃中の図（ここまでキレイに！）
(右) 側溝から出てきた「生活の証」の一部

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
Email：kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線：21750（本部企画課）

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとして簡単にご紹介します。それぞれの記事の詳細は、全学ホームページよりご覧ください。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
8月26日	大学院工学系研究科・工学部	ご父母のためのオープンキャンパス開催	7月20日
9月5日	宇宙線研究所	宇宙線研究所附属乗鞍観測所 60 周年記念講演会・式典及び祝賀会が開催されました	8月23日
9月6日	本部国際企画課	チリ CONICYT との合意書調印式等を開催	9月3日
9月13日	東洋文化研究所	平成 25 年度漢籍整理長期研修を実施	6月10日～14日 9月2日～6日
9月13日	広報室	広報誌「淡青」27 号が発行されました	9月13日

(8月19日～9月17日掲載分)

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/)・東大ポータル等でご案内しているさまざまなお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
9月1日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/ 人事異動（教員）

CLOSE UP

宇宙線研究所附属乗鞍観測所60周年記念講演会・式典及び祝賀会が開催されました(宇宙線研究所)

宇宙線研究所乗鞍観測所

宇宙線研究所乗鞍観測所 60周年記念式典の様子

宇宙線研究所附属乗鞍観測所の60周年記念講演会・式典及び祝賀会が8月23日（金）に松本駅近くのホテルモンターニュ松本にて開催されました。

乗鞍における宇宙線研究の始まりは、昭和24年（1949年）に大阪市立大学が畳平で行った実験です。翌25年（1950年）には大阪市立大学、名古屋大学、神戸大学、理化学研究所の4機関が朝日新聞学術奨励金を受けて、現在の乗鞍観測所が設置されている敷地内に通称「朝日の小屋」を建設し、日本の宇宙線研究に大きな弾みをつけました。そのような機運を受けて、昭和28年(1953年)8月に実験分野として初めて、全国の大学の共同利用のための研究機関として東京大学宇宙線観測所が乗鞍岳に設立されました。昭和51年（1976年）にはそれまでの宇宙線観測所は東京大学宇宙線研究所として生まれ変わり、乗鞍岳の宇宙線観測所は宇宙線研究所附属研究施設の一つである乗鞍観測所となり、現在に至っています。

60周年記念講演会・式典及び祝賀会当日は、生憎の雨天にもかかわらず、70名余りの出席者にご参集いただきました。記念行事は14時より式次第（本学ホームページ「トピックス」に掲載）に沿って進行し、大盛況のうちに閉会いたしました。参加者の最高齢者はおそらく90歳前後であり、さながら乗鞍観測所ゆかりの老若男女が一堂に会した同窓会といった雰囲気を醸し出していました。翌日の8月24日に予定されていた乗鞍観測所見学は、前日の大雨のために乗鞍観測所へアクセスする道路が封鎖となったために中止を余議なくされ、50名余りの見学希望者の皆様には大変残念な結果となってしまいました。

詳しくは本学ホームページ「トピックス」や宇宙線研究所のホームページをご覧ください。

最後になりましたが、乗鞍観測所が60年の長きに亘って発展を続けて来られたことは、関係者各位のたゆみない努力の賜物であると同時に、文部科学省、高山市や松本市など地元の方々からの温かいご支援・ご協力の賜物であり、この場を借りて皆様に感謝の意を表したいと思います。

東大フォーラム2013 開催のお知らせ（本部国際企画課）

前回（2011年）の様子

東大フォーラムのロゴ。今回より英文名称を“UTokyo Forum”とした。

東大フォーラムは、東京大学が優れた学術研究を広く海外に発信するとともに、海外の主要大学等との研究交流・学生交流をさらに進展させることを目的として、世界各地で現地の大学等の協力を得て継続的に開催しているシリーズイベントです。2000年の第1回以来、およそ2年に一度開催されています。

9回目を迎える2013年の東大フォーラムは、“Global Emergence of Frontier Knowledge（知の創発）”をテーマとして、カトリカ大学・チリ大学（チリ）、サンパウロ大学（ブラジル）等の協力のもと、チリ及びブラジルで開催する予定です。基調講演等からなる本部企画をはじめ、多くの部局主催研究ワークショップのほか、留学説明会・同窓会発足記念式典等を行います。

東大フォーラム2013 開催日程

チリ・サンチャゴ
2013年11月7日（木）・8日（金）
ブラジル・サンパウロ
2013年11月11日（月）・12日（火）
http://forum.dir.u-tokyo.ac.jp/

第12回東京大学ホームカミングデイ 開催のお知らせ（卒業生室）

昨年の様子

東京大学ホームカミングデイは今年で12回を迎え、本年度は10月19日（土）に開催します。

卒業生室/赤門学友会では、かつての仲間たち・恩師等との親睦を、また世代国境を超えた方々との活発な交流を図っていただけるよう、多彩なプログラムを用意しています。

メインプログラム「特別フォーラム」に加え、卒業後20年、30年、35年、40年、45年、50年を迎えた周年学年会、各種同窓会、講演会・シンポジウム、家族で参加できるイベント等があります。また銀杏並木は、東大と縁の深い蔵元や近隣商店街のご協力による模擬店が出店、パフォーマンス等で賑わいます。教職員のみなさまも秋の１日、学生気分に戻ってお過ごしください。

第12回東京大学ホームカミングデイ
10月19日（土）10:00～　本郷／駒場キャンパス
http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/hcd/
または「東大ホームカミングデイ」で検索

＜主なプログラム＞

◆特別フォーラム「未知の領域に挑む」
時間：12:30～14:15
場所：伊藤国際学術研究センター
パネリスト：田中純一（素粒子物理国際研究センター准教授）、上田泰己（大学院医学系研究科客員教授）
モデレータ：藤原帰一（大学院法学政治学研究科教授）

◆卒業20、30、35、40、45、50周年学年会

CLOSE UP

淡青27号表紙

広報誌「淡青」27号を発行（広報室）

淡青27号の特集は「スポーツと東大。」。

注目の現役学生選手から世界で活躍する卒業生アスリート、日夜スポーツ探究に打ち込む研究者まで、文武両道を体現する「たくましいソクラテス」たちの姿をお届けしています。ぜひご一読を。

WEB版の閲覧・冊子版のお取り寄せ方法のご案内は以下をご覧ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/tansei_j.html

編集後記

こんにちは。4月から「学内広報」と「淡青」を担当している高井です。広報課に来る前は15年ほど自宅でひきこもり系のフリー編集ライターをやっていました。東大に来てそろそろ半年になりますが、FC東京のファンにまだ一人もめぐり会えていないのが少々残念です。ここは東京のはずなのに青赤の血が通った人はいないのでしょうか……。で、今回の特集では、そういったこととか口臭とか腰痛とか人生設計とかのマイ悩みを、なんでも相談コーナーに行って相談したいと思ったのですが、どう考えても学生には関係がないので、ギリギリであきらめました。あぶないあぶない～。ちなみにこの特集のBGMは「My Favorite Things」らしいですよ。（高）

淡青評論

七徳堂鬼瓦

フルマラソンの博士号

ずいぶんと個人的な話題で恐縮なのだが、今年の3月にフルマラソンの自己記録を更新した。高校のときから陸上を始め、すでにフルマラソン歴は20年ほどになる私は、近年のいわゆるマラソンブームを、かなり斜に構えつつ眺めていた。例えばほとんど練習もせずに有名な大会に記念出場し、結局は後悔しながら歩いているようなランナーを見ると、正直苦々しく思わざるを得なかった。しかしそんな私もやはりブームの影響を受けたのだろう、ランナー誰しもが欲しがる称号をふと欲しくなったのである。その称号とは、一般的に言う「サブスリー」、すなわちフルマラソンで3時間を切ることであった。サブスリーは、マラソン界の博士号に値すると私は勝手に考えている。実際のところ、アカデミックの世界における博士号と、サブスリーとは共通点が多い。きわめて少数の人しか持っていない点――3時間切りは、全ランナー人口の3, 4%に過ぎない――、かなりの努力と時間が要求される点、持っていることは名誉であるが、あまり就職といった実利に結びつかない点――これは皮肉――などなど。

3月に自己記録を出したものの、まだ少しサブスリーには届かなかったので、そこからの3ヶ月間は、さらに必死の思いで練習を継続した。総距離は1000キロ以上、体重も学生の頃と同じくらいに戻り、家族からも様々な献身的なサポートを受けた。その結果、サブスリーには届かなかったものの、4月半ばには再び自己記録をたたき出した。そして最後のレースである6月の大会に臨んだのであった。・・・その結果は博士号と異なり、個人情報なのでここでは公開しないことにするが、目標をもって何かに取り組んだ日々は、すばらしく充実したものだったことは付言しておいてよいだろう。もちろん結果を出すことは重要であるが、それへ行き着くまでのプロセスは、結果に勝るとも劣らないほど大切な場合があることを、改めて考えさせられたここ数ヶ月間であった。

保城広至
（社会科学研究所）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

東京大学広報室
no.1444 2013年9月24日

〒113-8654　東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
http://www.u-tokyo.ac.jp